熊野堂地区のあゆみ

『祈りの山』～『霊場・山城』～そして住宅地へ

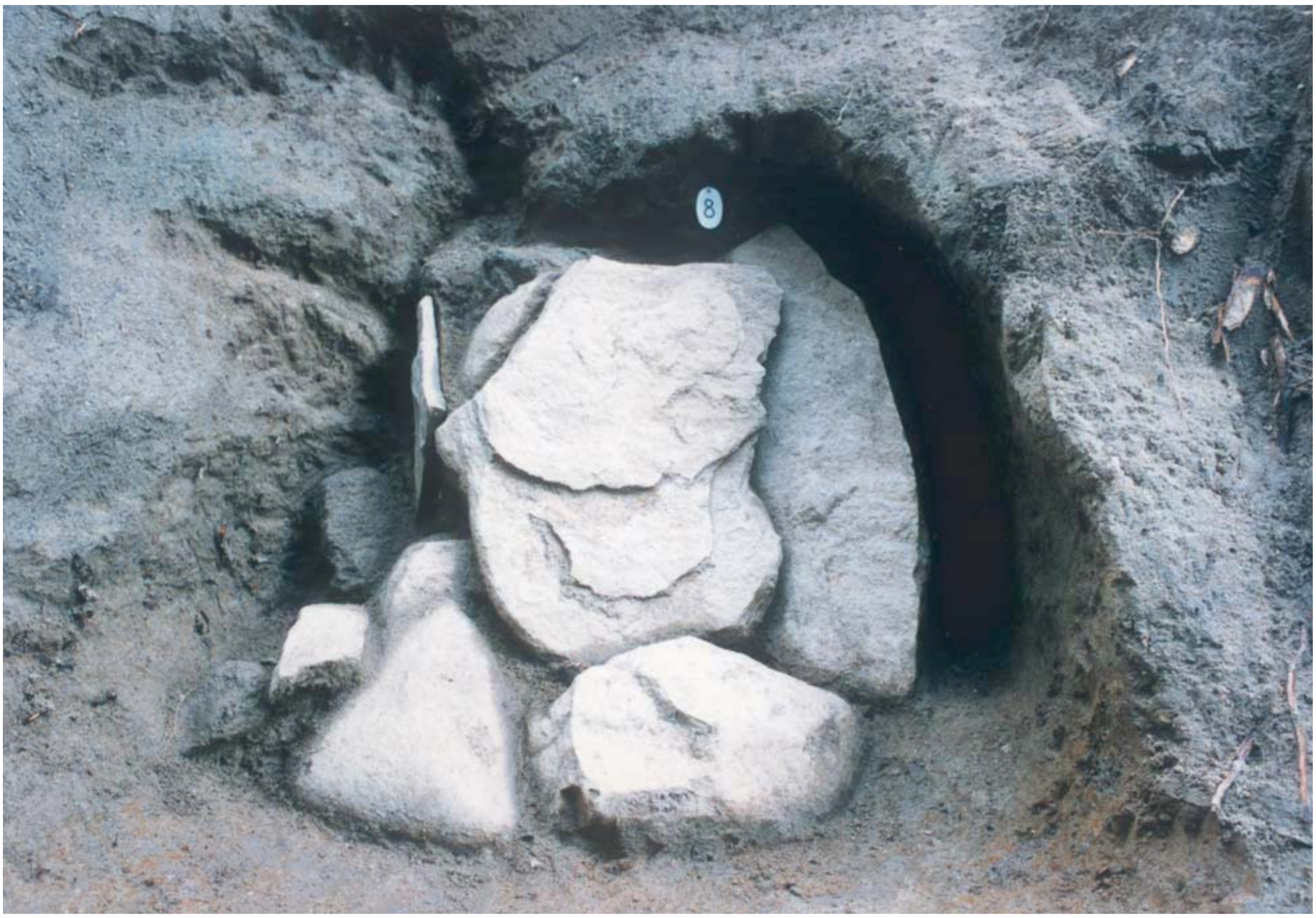
山の斜面に造られた多数のお墓

～熊野堂横穴墓群（くまのどうよこあなぼぐん）～

所在地：高舘熊野堂字大門山・五反田

古墳時代の終わり頃になると、有力者のお墓として、丘陵斜面の柔らかい場所にトンネル状に穴を掘った横穴墓が数多く造られました。横穴墓（よこあなぼ）は、入口をふさぐ石を開閉して何回も使用する事ができるものです。熊野堂横穴墓群は、７世紀はじめ頃から８世紀にかけて造られ、全体で百数十基以上の数があると言われています。お墓の中には、土師器（はじき）・須恵器（すえき）と呼ばれる土器の他、玉類（たまるい）、鈴釧（すずくしろ）、金環（きんかん）・刀・鉄鏃（てつぞく）などが一緒に納められていました。

全体のようす

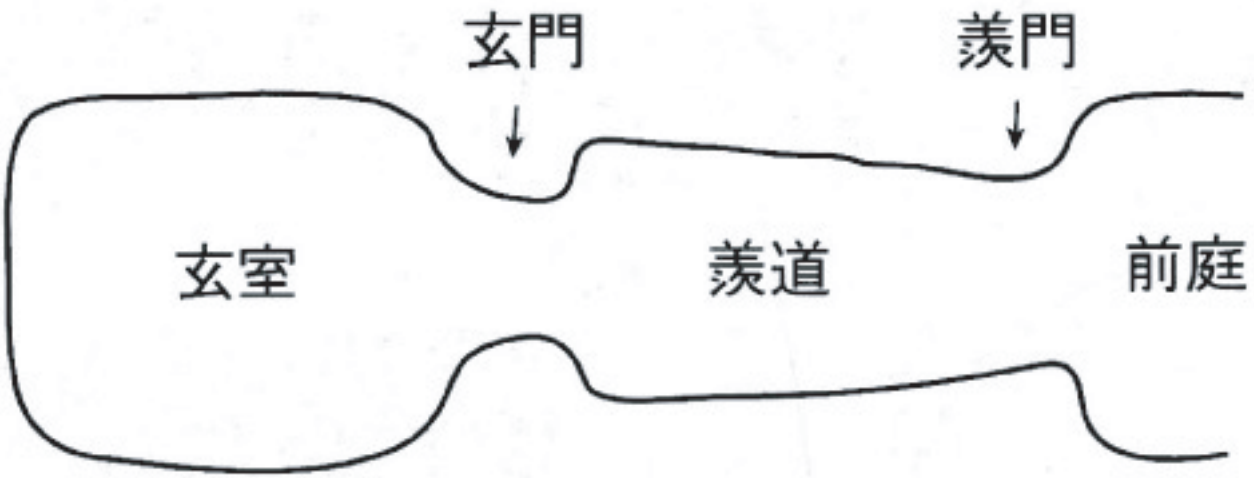


石で閉じられた玄門（げんもん）

石をはずした玄門

げんしつ
玄室の中のようす

見つかった土器や刀



【玄門】げんもん
玄室の入口。この前に石を重ねて横穴墓をふさいだ。
【羨道】せんどう
外部から玄室へ通じる通路。
【前庭】ぜんてい
横穴墓の入口。
【玄室】げんしつ
棺に遺体を入れて葬る部屋。
【羨門】せんもん
羨道の入口。この前に石を重ねて横穴墓をふさいだ。

石室（せきしつ）の模式図

コラム　よみがえる１３００年前の鈴の音！

　これは、熊野堂横穴墓から見つかった実物の鈴釧（すずくしろ）です。釧（くしろ）は、古墳から出土した人物埴輪（はにわ）の様子などから腕輪と考えられているもので、鉄・青銅・石・貝製のものがあります。この鈴釧は銅製で、正円形に５個の鈴が付けられており、入口が閉じられた横穴墓から出土したことから、保存状態が良く、現在もきれいな澄んだ音色を奏でます。

すずくしろ
鈴釧

（腕輪）

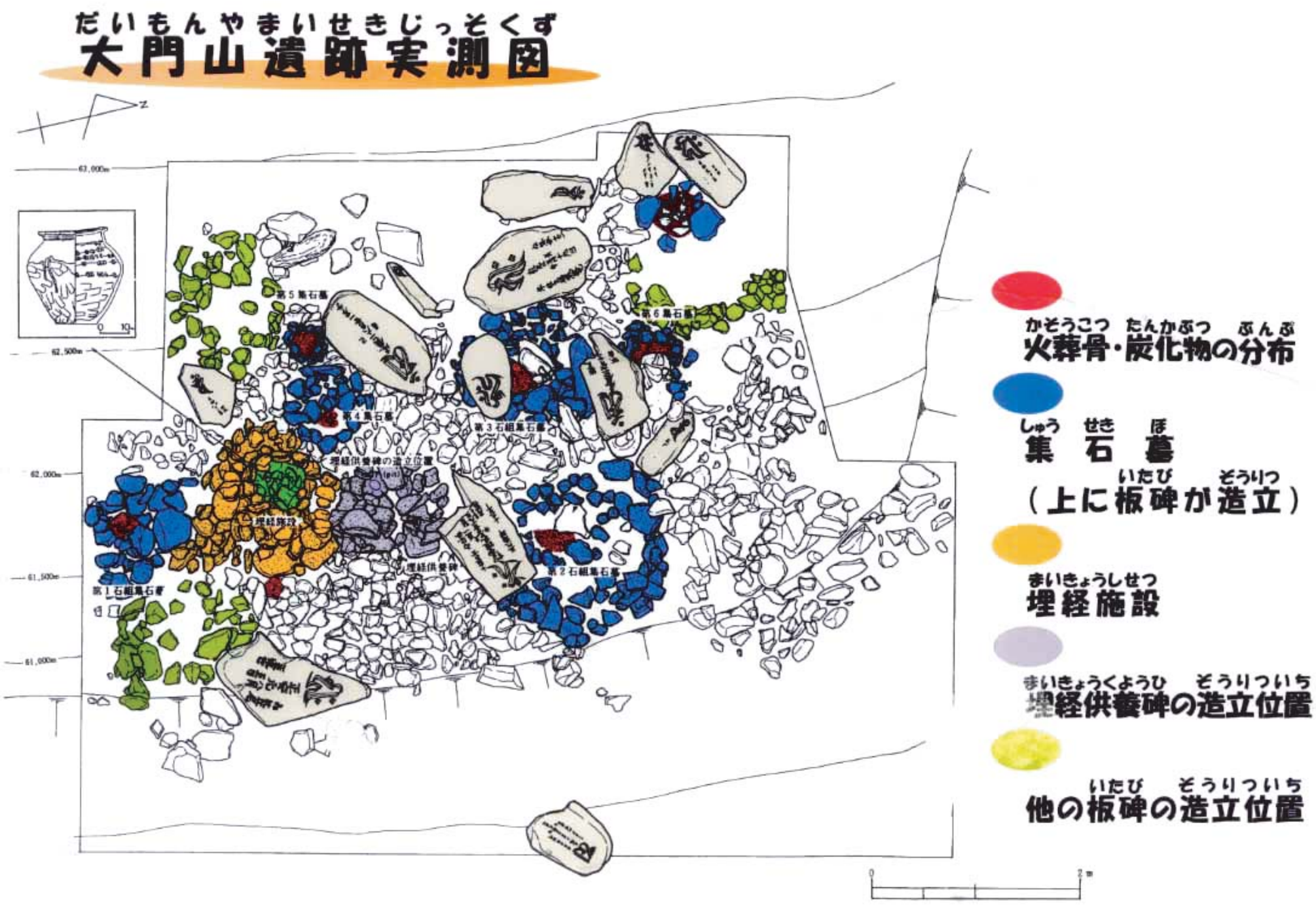
板碑に込められたいのり

～大門山（だいもんやま）遺跡～

所在地：高舘熊野堂字大門山

大門山遺跡は、熊野新宮寺の南西側に位置し、寺ノ沢と院ノ沢に挟まれた丘陵の南斜面に立地しています。発掘調査の結果、250基あまりの板碑と呼ばれる中世の石碑の他、お経を入れて埋めたと思われる甕（かめ）や、焼いた骨を納めた集石墓（しゅうせきぼ）（石を集めたお墓）群などが発見され、熊野信仰布教に関わった人々の墓所や、信仰した人々の供養の場であったと考えられています。

見つかった遺跡や集石墓



うめられていた甕（かめ）

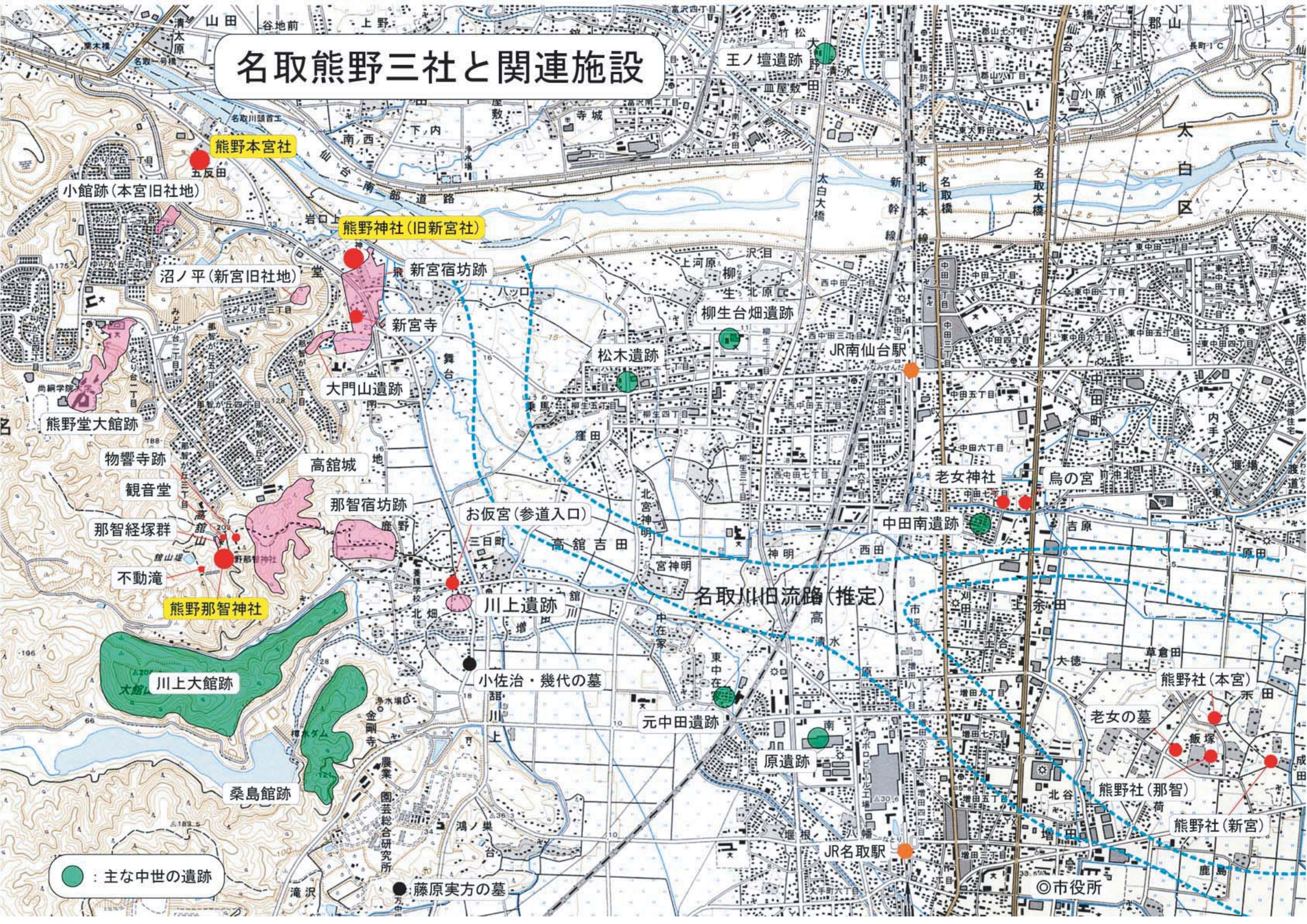
東北の熊野信仰の中心

～名取熊野三社（なとりくまのさんしゃ）～

　全国３，０００ヶ所以上と言われる熊野ゆかりの寺社の約４分の１は東北地方にあり、人々に広く受け入れられた事が分かります。中でも保安（ほうあん）年間(1120～1124)に名取老女（なとりろうじょ）によって勧請（かんじょう）されたと伝わる名取熊野三社は、

仙台湾を熊野灘（くまのなだ）、名取川を熊野川、高舘丘陵を熊野連山（くまのれんざん）に見立て、本宮（ほんぐう）・新宮（しんぐう）・那智（なち）の三社を別々に勧請するなど、紀州熊野の姿を再現したかのような特徴は珍しく、東北の熊野信仰布教の拠点の１つであったと言われています。

名取熊野三社と関連施設



熊野本宮社（くまのほんぐうしゃ）

所在地：高舘熊野堂字五反田

本宮十二神（ほんぐうじゅうにしん）とも称され、作物神の家（け）津御子神（つみこのかみ）を祀（まつ）っています。以前は、南に500mほど離れた小館（こだて）と呼ばれる山上にありましたが、万治（まんじ）元年（1658）に現在地に移ったと伝えられます。

当社所蔵の「名取熊野本宮永留（なとりくまのほんぐうながとめ）」から、永禄（えいろく）6年(1563)伊達晴宗（だてはるむね）公より神輿（みこし）・御神馬（ごしんめ）などが、政宗公の仙台開府以降も藩から毎年玄米を拝領するなど、伊達家との深い関係が分かります。

また、当社には民俗芸能の「熊野堂（くまのどう）十二神鹿踊（じゅうにしんししおどり）」が伝わっています。

熊野本宮社

熊野堂十二神鹿踊

熊野新宮社（くまのしんぐうしゃ）

所在地：高舘熊野堂字岩口上

主神に速玉神（はやたまのかみ）を祀り、明治以後は熊野神社と称しました。伝えられた文書や新宮寺一切経（しんぐうじいっさいきょう）・文殊菩薩像（もんじゅぼさつぞう）などからも、平安時代末の成立以後、多くの人々から信仰を集めた事や、江戸時代を通じて伊達家と深い結び付きがあった事などが分かります。

また、新宮社の南方約 300m地点には社務を取り仕切っていた別当寺（べっとうじ）の新宮寺があり、開山の時期は不明ですが、中世にはすでに成立していた事が確認されています。

熊野新宮社

熊野新宮寺

新宮寺文殊堂

新宮寺文殊菩薩像と眷属（けんぞく）像

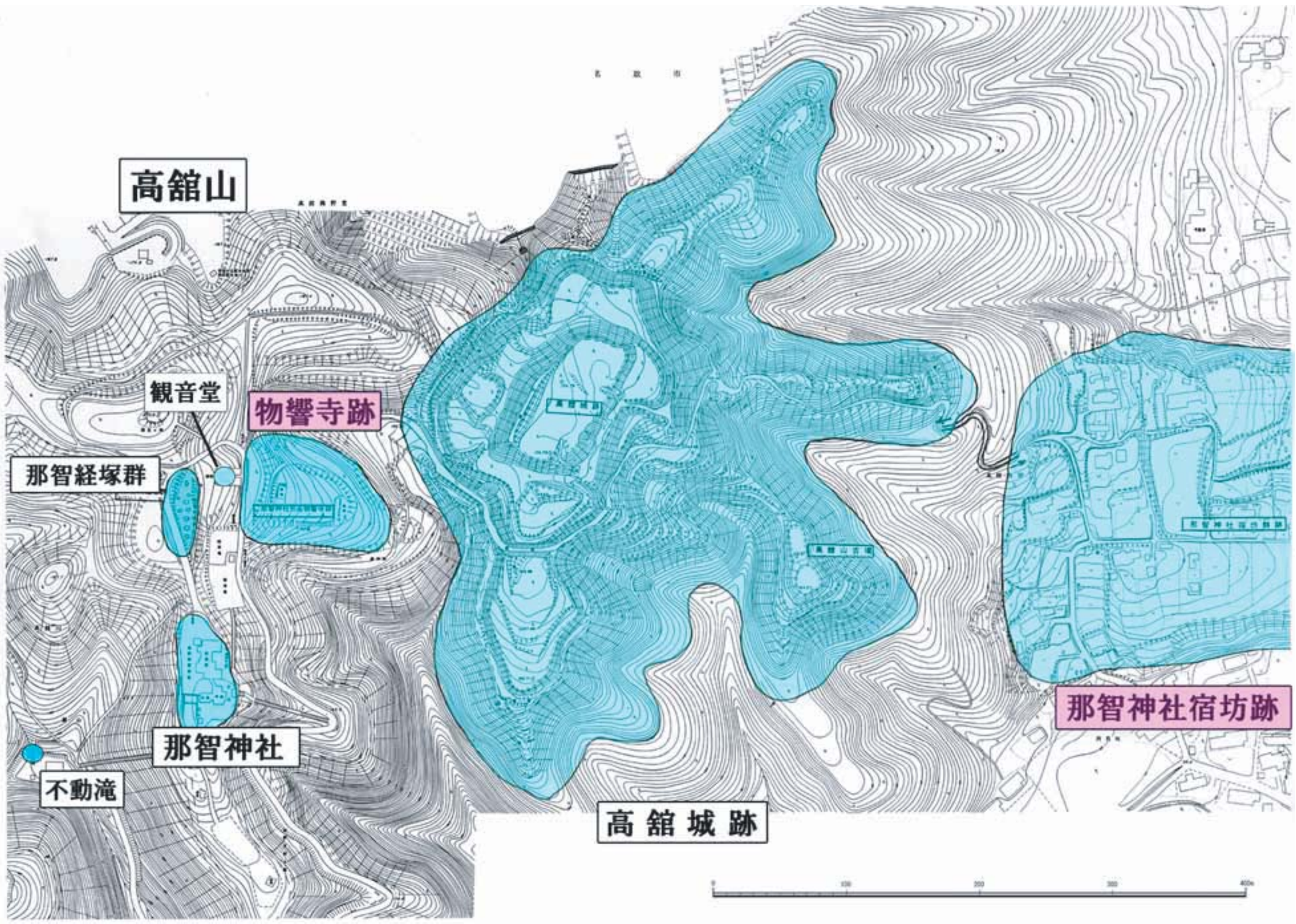
熊野那智神社（くまのなちじんじゃ）

所在地：高舘吉田字舘山

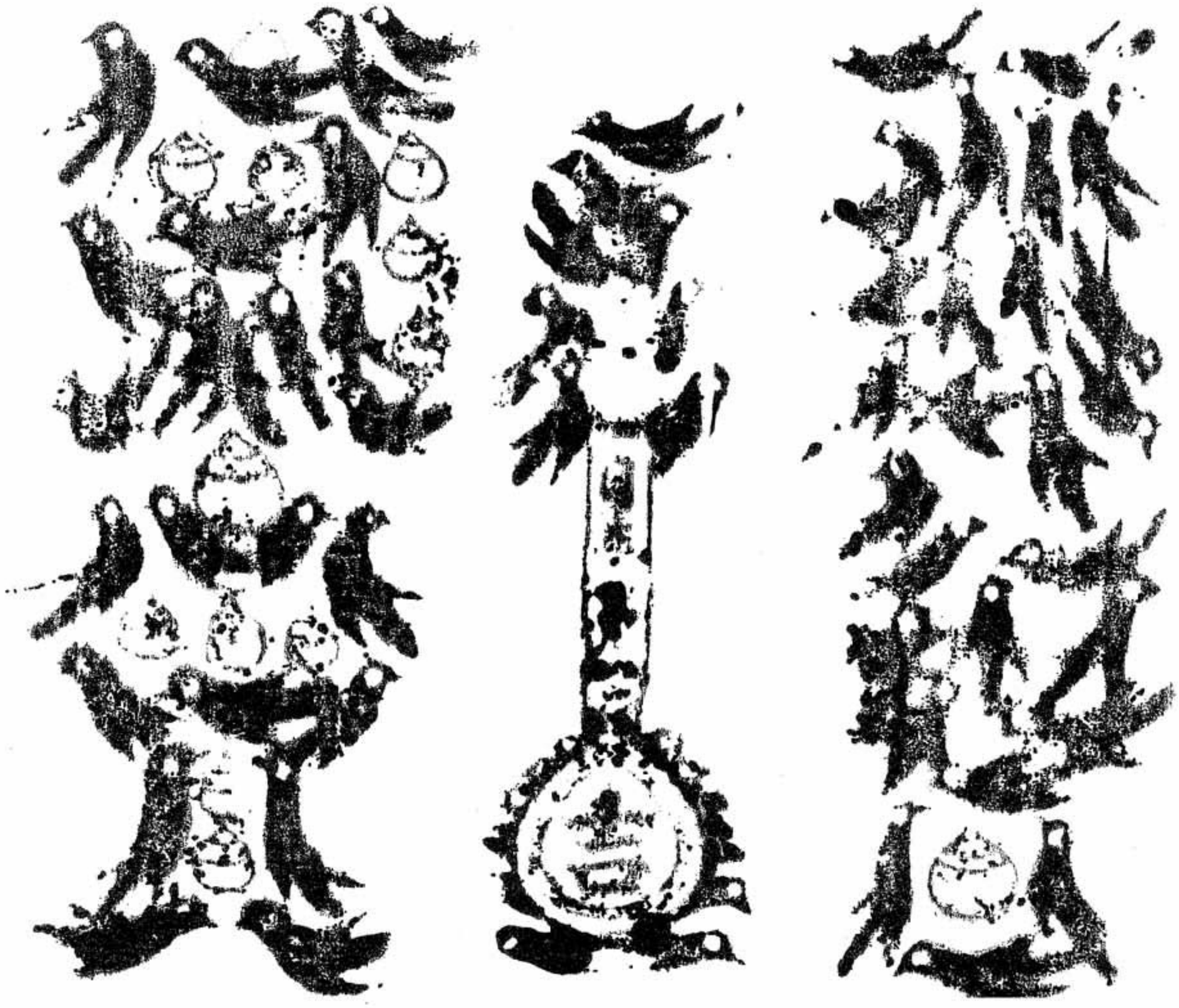
主神に熊野夫須美神（くまのふすみのかみ）を祀り、平野や太平洋を望む高舘山にあります。江戸時代の記録には「養老（ようろう）3年(719)広浦(閖上)の漁師治兵衛が漁で引き上げた御神体が山に向け光を放ったことから高舘山に羽（は）黒権現（ぐろごんげん）を祀り、保安（ほうあん）4年(1123)に名取老女が熊野那智大社の分霊を合祀（ごうし）して那智神社と改称した」と由来が記されています。

神社には、懸仏（かけぼとけ）・銅鏡（どうきょう）155点（鎌倉時代）や、正月に氏子へ配布した「カラスゴ(牛王宝印)」が伝わる他、かつて旧暦6月の恒例祭に「浜下り」の神事が行われていたことが知られています。

熊野那智神社



那智神社付近の見取り図



熊野那智神社の牛王宝印（ごおうほういん）

熊野那智神社 懸仏

受け継がれてきた舞などの神事

熊野本宮社の熊野堂十二神鹿踊は、文安(ぶんあん)年間（1444～1448)に米沢の山伏修験者(やまぶししゅげん)により伝えられたと言われ、衣装や芸態は旧仙台藩内の鹿踊りの中でも独特なものとされています。

新宮社の熊野堂神楽(くまのどうかぐら)は、文治(ぶんじ)年間(1185～1190)に京都から伝わった出雲の流れをくむ神楽です。周辺の神楽の元祖と言われ、随所に修験の呪法(じゅほう)の名残りが見られます。演目は十三番あり、神楽を舞う７軒の社家は世襲で今も厳格に守られています。現在は神楽殿で春と秋の例祭時に披露されていますが、江戸時代には神社の長床で舞われていたと言われています。

同じく新宮社に伝わる熊野堂舞楽(くまのどうぶがく)は、時期は不明ですが渡来楽人(とらいがくじん)の林家の系統と言われています。現在５曲が伝わり、年に一度春の例祭時に池の中の特設舞台で舞われます。神楽同様７軒の社家が守り伝える門外不出のもので、県内に伝わる数少ない舞楽の一つです。

熊野堂舞楽

神楽面（かぐらめん）と舞楽面（ぶがくめん）（熊野神社所蔵）

これらの面は、県指定の熊野堂神楽（くまのどうかぐら）や熊野堂舞楽（くまのどうぶがく）で、演目に合わせて使用される面が異なります。いずれの面も木彫りで、用材に桐を使用しているものや、漆塗りや色彩のあるものもあります。面には記銘などは残っていませんが、特徴から古いものは室町時代末期頃のものと考えられています。これまでの何回か修理されながら大切に使われてきたものです。

しめきりのまい
注連切之舞
かぐらめん
（神楽面）

くにしずめのまい
国鎮之舞
かぐらめん
（神楽面）

おきなのまい
翁之舞
かぐらめん
（神楽面）

ばっとうめん　ぶがくめん
抜頭面（舞楽面）

コラム　名取老女の物語

名取熊野三山は、名取老女によって勧請されたとの説話が有名です。その言い伝えは、神社の縁起（えんぎ）や、江戸時代の記録などに記されていますが、その出自や性別など細部に異なる記述も見受けられます。また、平安時代や鎌倉時代の歌集では、名取老女の説話と

同内容の歌を「熊野へ参詣する陸奥（むつ）老女の歌（梛（なぎ）の葉の奇跡の原型）」としており、意図的かどうか分かりませんが、次第に名取熊野三社の発展と結びつけられて変化していったものかもしれません。

名取老女の墓（下余田地区）

名取老女の物語の内容

永正二年（1505年）『熊野堂縁起』（江戸中期写本）から

「昔、名取郡に１人の老女がおり、熊野三山を深く信仰し、毎年紀州熊野に参詣していたが、年老いて叶わなくなり、保安四年（1123）に名取の里に熊野三山を勧請して祭礼を欠かしませんでした。一方、保延年中（1135～41）に奥州巡遊を志した熊野山伏が、旅の安全を祈願し本宮証誠殿で一夜のお籠りをしていた所、「名取老女を訪ねてみよ」とのお告げがありました。目覚めて枕元を見ると一枚の梛の葉（熊野の御神木。参詣者はその葉を頂いて帰る習わしがあります）があり、虫食いの跡が「みちとおし　としもいつしかおいにけり　おもいおこせよ　われもわすれじ」と言う一首の歌を記していました。これを持った山伏が名取の里へ来て老女に夢告の事を話すと、老女は名取の里に勧請した熊野三社へ山伏を案内しました。山伏の勧めに従い老女が熊野の神に幣帛を捧げて祭文を唱えると、熊野権現の使者である護法善神が現れて老女の頭に降りて光彩を放ちました。この奇蹟を見ていた村人達は感激して、それ以降村人達も熊野三社を祀るようになり、老女の死後は証誠殿の傍らに老女の宮が祀られました。」という内容で、名取老女が熊野三山の成立に深く関わっていた事を記しています。

新宮社の本殿（ほんでん）脇に建つ老女の宮

戦いに備えた山城（やまじろ）

熊野三社が所在する丘陵部には、熊（くま）野堂大館跡（のどうおおだてあと）・高舘城（たかだてじょう）をはじめとする山城がありました。熊野三社成立後も名取の地は多くの政治的・軍事的な争いが起きた事でしょう。そうした中で独自の政治力・情報網・軍事力・資金力などを使い、現在にその姿を伝えてきたのでしょう。これらの山城も、熊野信仰布教に関わった修験集団（しゅげんしゅうだん）の政治・軍事・宗教面での拠点（きょてん）施設であったと考えられています。

熊野堂大館跡（くまのどうおおだてあと）

所在地：高舘熊野堂字大門山
ゆりが丘・みどり台

本宮社の南方約800m、標高210m前後の、三方が深い谷に囲まれた丘陵上に立地する天然の要害です。この館跡は、『仙台領古城書上』に記された「黒崎城（くろさきじょう）」、『安永風土記（あんえいふどき）』の「黒崎館（くろさきやかた）」にあたるものと思われ、南郭（なんかく）・中郭（ちゅうかく）・北郭（ほっかく）から成る東西150m・南北600mの山城です。

発掘調査の結果、土塁や空掘に囲まれた平場などから、多くの掘建柱建物跡（ほったてばしらたてものあと）などが発見され、常滑焼（とこなめやき）や古瀬戸（こせと）などの陶磁器類や、「かわらけ」などの土器類、斧（おの）や鏃（やじり）などの鉄製品、硯（すずり）や石臼などの石製品、中国産の古銭類などが出土しました。

それらの特徴から、館跡の存続年代は鎌倉～室町時代(14世紀～15世紀後半)頃と考えられています。

中郭・南郭付近のようす

北郭の調査のようす

熊野堂大館跡出土遺物

熊野堂小館跡（くまのどうこだてあと）

所在地：ゆりが丘

小館跡は、熊野本宮社の鳥居から南方の標高124mの丘陵突端にあったと言われています。1983年の調査から、館跡の範囲は東西約100m・南北約200mで、頂部（ちょうぶ）の約10m四方の方（ほう）壇状（だんじょう）の高まりを中心に３段の円形の曲（くる）輪（わ）がめぐるものと考えられています。頂部や曲輪から建物跡などは発見されれませんでしたが、方壇状の高まりの南側から、古瀬戸の仏花瓶（ぶっけびょう）破片と古銭３枚が発見されています。

鳥居の先に見える小館跡

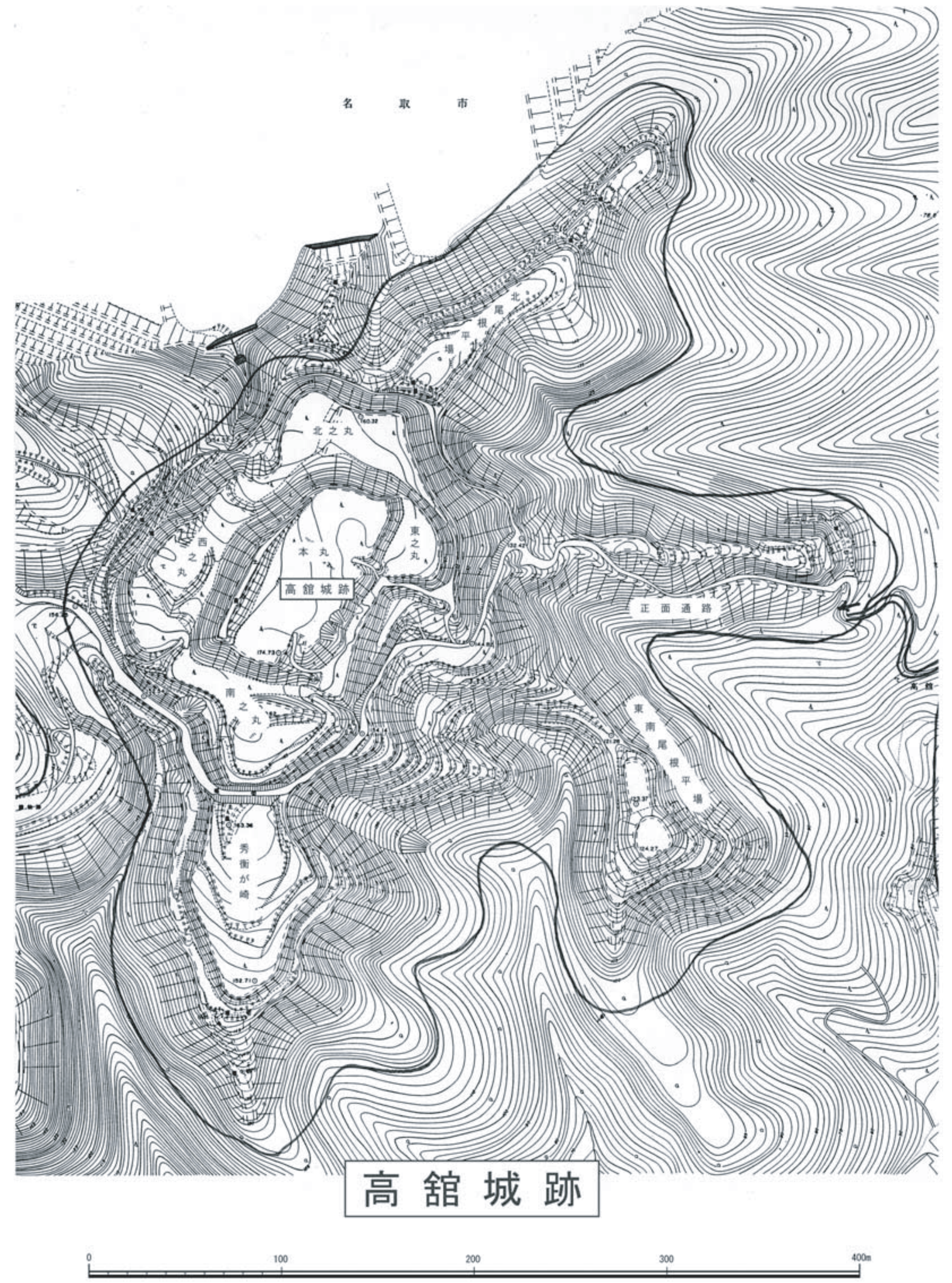
出土した古瀬戸（花瓶の底部分）

高舘城（たかだてじょう）

所在地：高舘吉田字西真坂

高舘城は、高舘山（標高203m）の中腹から山頂付近にかけて築かれた山城です。規模は、土塁（どるい）や平場などが認められる東西400m・南北500mの範囲で、中央の本丸の周りを、北ノ丸・東ノ丸・南ノ丸・西ノ丸が取り囲む構造です。市内にある中世の城館（じょうかん）の中でも典型的な山城（やまじろ）として重要なものです。

高舘城の遠景


名取市
北尾根平場
北之丸
東之丸
西之丸
本丸
高館城跡
正面通路
南之丸
東南尾根平場
秀衡が崎
高館
0
100
200
300
400m

高館城跡

記録にのこる高舘城

江戸時代の記録には、東側へ延びる３ヶ所の尾根の１つに藤原秀衡(ふじわらのひでひら)が館を築き、文治(ぶんじ)五年(1189年) 奥州合戦の時に藤原勢が立て籠もり、鎌倉勢を迎え撃った場所だとの伝えもあります。

また、観応(かんのう)（1350～1352）の擾乱(じょうらん)の、多賀城の攻防について記した文書に見える「羽黒城(はぐろじょう)」・「名取要害(なとりようがい)」は高舘城の事だと言われ、延宝(えんぽう)年間（1673～81）成立の『仙台領古城書上(せんだいりょうこじょうかきあげ)』「高舘城」の項には、永禄(えいろく)年間(1558～1570)に伊達稙宗(だてたねむね)が一時居城し、その後、家臣の福田駿河守(ふくだするがのかみ)を城主として置いたとの記述があります。

１万人以上が住む大きな団地

平成になると、それまで信仰の山だった高舘山あたりにも大きな開発の波が押しよせました。仙台市のベッドタウンとしての住宅団地の建設が始まったのです。

それから２０数年が経った今、団地全体の戸数（こすう）は約 4,700 戸、人口は約 14,000 人（H26.8 時点）となっており、

これは名取市全体の人口の２割弱となります。また団地内には小学校３校、中学校１校、公民館３館などの公共施設のほか、大学も設置されています。

東から見た那智が丘団地

尚絅学院大学から見たゆりが丘団地

高舘熊野堂地区の住宅団地建設の歩み

団地名	分譲開始	現在の戸数	現在の人口
ゆりが丘	平成元年	１，７８８	５，３３８
相互台	平成元年	１，１９１	３，４９３
那智が丘	平成２年	１，２７６	３，７７７
みどり台	平成８年	４６１	１，５８９

(現在の戸数と人口は平成 26 年８月末での数字)

造成された団地（平成４年）

コラム　彫刻（ちょうこく）の街　那智が丘

　那智が丘を散策すると、公園や道路ぞいに多くのブロンズや石製の彫刻を目にすることが出来ます。その数は４０近くになり、少女や母子などの人物、ヤギやフクロウなどの動物などさまざまです。

　これは那智が丘を芸術とふれあう街にしようと、緑と彫刻の散歩道を整備する建設当初からの方針によるものです。

彫刻が集う中央公園

母と子　　平井一嘉

シルム　佐藤淳一

空から　西村文男

少女と夏水仙　金子健二

パパのズボン　加藤　豊

梛(なぎ)の木

　この木は姉妹都市の和歌山県新宮(しんぐう)市からからいただいたものです。梛の木は熊野の御神木(ごしんぼく)で、紀州(きしゅう)（和歌山県）の熊野速玉神社(くまのはやたま)境内には国天然記念物に指定されている樹齢 1000 年の大樹があります。名取老女の物語でも、熊野の山伏は夢のお告げと梛の葉に記された和歌に導かれ、名取老女の元を訪ねており、熊野権現(くまのごんげん)と梛の木が深いかかわりを持っていることが分かります。

　熊野詣(くまのもう)では、参詣者が御神木の梛の葉を頂く習わしがありますが、この梛の木はまだまだ子どもなので、優しく成長を見守り、触れないようにお願いします。